

異類婚姻譚の類型分析

—— 日韓比較の視点から ——

川 森 博 司

はじめに

1 「異常誕生」と「異類婚姻」

2 日本の異類譚の類型

3 韓国の異類譚の類型

4 異類女房譚の類型

5 諸類型の整理

論文要旨

本稿は、日本と韓国の事例の比較の視点から、異類婚姻譚の類型を整理し、日本の異類婚姻譚を東アジアという視野の広がりの中で考察していくための足がかりを作ることをめざしたものである。類型の分類においては、人間と異類の婚姻が成立するか、成立しないか、ということを経第一の基準とし、次に「異類譚」と「異類女房譚」に分けて、諸類型の記述をおこなった。婚姻が成立する類型の主なものは、異類が人間に変身して人間との結婚を成就するという形をとるもので、日本においては「田螺息子」の話型があるが、それ以外にはあまり見られない。韓国においては、異類譚、異類女房譚ともに、この類型のものが相当数伝承されている。一方、婚姻が成立しない類型は、異類譚においても、異類女房譚においても、日本の異類婚姻譚の主要な部分をなしている。日本の異類譚においては、人間の女が計略を用いて異類の男を殺害して、婚姻を解消する「猿掣入」や「蛇掣入・水乞型」の伝承がきわめて数多く伝えられている。この形の伝承は韓国には見られないようである。また、日本の異類女房譚では、異類の女の正体が露見したために結婚が解消される形の「鶴女房」や「蛇女房」などが幅広く伝承されている。この類型は韓国にも存在するが、日本の場合ほど顕著にはあらわれない。韓国では、婚姻が成立しない類型においても、一時的な異類との交渉の結果、非凡な能力をもった子どもが生まれる形のものが多く見られる。ただし、これらの点について比較をおこなうとき、『韓国口碑文学大系』においては、昔話と伝説を一括して収録しているのに対し、日本の昔話の資料集は、伝説と区別して、昔話を収集していることを考慮しなければならない。本稿でおこなった類型の整理は、個々の話型についての分析をおこなっていくための土台となるものであり、また、「説話を通して文化を読む」ための基礎作業である。

はじめに

日本の民俗社会においては、人間と異類（動物）の婚姻を話の主要な枠組みとする昔話（異類婚姻譚）が数多く語り伝えられてきた。『日本昔話大成』の「本格昔話」の部が「婚姻・異類」 「婚姻・異類女房」の項目から始められていることからわかるように、この異類婚姻譚は、日本の昔話のなかで大変重要な位置を占めている。筆者がめざす「説話を通して文化を読む」という立場からすれば、異類婚姻譚を的確に読み解いていくことが、日本の昔話をもつ意味を理解する上でひとつの鍵になる役割を果たすといえる。本稿では、日本の異類婚姻譚の類型を韓国のもものと比較して考察することにより、日本の異類婚姻譚がもつ意味を東アジアという視野の広がりにおいて、より客観的にとらえていくための足がかりを作ることを目標とした⁽¹⁾。

日本昔話の類型の考察の基準となる『日本昔話大成』全12巻を編集した関敬吾は、日本の昔話（笑話・動物譚をのぞいた本格昔話）の全体を、まず「婚姻を主題とする昔話」と「富の獲得を主題とする昔話」の二つの群に大別する。そして、第一群の「婚姻を主題とした昔話」を、「動物（異類）婚姻譚」、「異常誕生譚」、「継子譚」、「人間相互間の婚姻譚」の四つのグループに分類している（関1981 [1959]: 265-267）。

本稿では、このうち「異類婚姻譚」と「異常誕生譚」を相互に関連するものとして考察する視点から出発して、日本の「婚姻を主題とする昔話」をより体系的に理解していくための枠組みの設定をめざすことにしたい。

1 「異常誕生」と「異類婚姻」

『日本昔話大成』において「誕生」の項目に分類されている昔話のうち、「異類と人間の婚姻」のモチーフをもつものに、「田螺息子」と呼ばれる話型がある。次のような話である。

事例1 爺婆に子どもがなく、神に祈願し田螺を拾って子どもにする。嫁をもらう年ごろになる。爺婆がなげくのを聞いて、はったいの粉を握り飯につけてもらい嫁探しに行く。長者の家に泊まり、握り飯を食ったものは嫁にするとあずける。夜中に美しい妹娘の唇に粉をつけて嫁にして連れ帰る。田螺は麦藁に針をさして刀にし、笹舟に乗って鬼が島に行き、鬼の鼻に入って退治して宝物を持ち帰る。その宝物の中の打出の小槌で打つと、田螺は長者の娘にもまさるりっぱな男になった。

—長崎県南高来郡—（関1978b:13）

また、主人公が「田螺息子」の場合のように異類ではないが、「田螺息子」と同様の筋の展開をもつものに「一寸法師」の項目に分類されている昔話がある。一つ例をあげてみよう。

事例2 爺婆は子が欲しくて、神に願掛ける。毎日脛にたんぺをつけろと言われ、つけると

脛から少童が生まれる。すねこたんべと名づける。少しも大きくなならないが商いが上手で魚屋をする。ある家で魚と米を交換し、その家に泊まる。そこの娘の唇に、米をかみつぶし塗って、米を盗まれたと泣く。娘は家を出される。すねこたんべは娘を連れて帰る途中、川に飛ばされる。娘は鮒を持って実家に帰り、鮒をさくと中からすねこたんべが出てきて、りっぱな若者になり、娘と二人で家に帰る。

—宮城県栗原郡— (関1978b:36)

事例1, 2の話に共通する筋の展開の基本的な枠組みを示すと次のようになる。

- I. <欠損1> 老夫婦に子どもがない。
- II. <欠損1の解消> 老夫婦に特別な形の子どもの授かる。
- III. <欠損2> 主人公が異常な姿をしているため、結婚相手がいない。
- IV. <欠損2の解消> 主人公が普通の人間の姿に変身して結婚する。

事例1においては、主人公の異常な姿が「田螺」という形で示され、事例2においては、異常に小さな子どもという形で示されている。柳田国男は、この種の異常誕生の物語の要点の第一は「貴き童児が信心ある者の希望に応じて与えられること」であり、そのことを示すために「ほとんど人間の空想し得る限りの、あらゆる信じがたい出現の方式が語られたのであろう」と述べている(柳田1990 [1933]:192-193)。つまり、田螺という形での出現も、一寸法師という形での出現も、主人公が「貴き童児」であることを示すための語り方の一つとしてとらえられる、というのである。

さて、ここで柳田が主張するように、「田螺息子」の昔話は、一寸法師や桃太郎の系統の昔話と一連のものにとらえることもできるが、一方で「異類(動物)が人間に変身して、人間との結婚を成就する」というモチーフのほうに注目すると、異類婚姻譚のグループの中に位置づけることもできる。では、次に日本において非常に類話数の多い話型である「猿筆入」の例と並べて、比較してみることにしよう。

事例3 昔、三人の娘をもった爺がいた。日照りの年で、田の水がかれて困っていた。ある日、「田に水をかけてくれたら、娘を誰でも嫁にやるぞ」と叫んでみた。すると、山の猿がそれを聞きつけてやって来て、田に水をかけた。爺は「つまらない約束をしてしまった」と困り果てて家へ帰った。爺から事情を聞いて、長女と次女は断ったが、末娘は親思いで、猿の嫁になることを承知した。そして、すぐに猿が迎えに来て、末娘は嫁入りした。やがて、娘は爺に餅を食べさせたいと言い、猿に大きな臼と餅を背負わせて里帰りに向かった。途中で猿は餅を山道から落としてしまい、娘はかわりに谷川のそばに咲いている桜の花をとってくれ、と言う。それで猿はそれをとろうと木に登ったが、枝が折れ、猿は谷川に落ちておぼれ死んでしまった。それを見て娘は大喜びで家に帰り、爺から田畑をもらって、ずっとその家で暮らした。

—山形県最上郡— (関1978a:72-76)

この話の筋の展開の基本的な枠組みは次のようになる(小松1987 [1984]:22参照)。

- I. <欠損1の発生> ある男(の家)に欠損が生じる。
- II. <交換の提案> 男が、欠損を改善してくれた者に自分の娘を差し出す、と申し出る。
- III. <欠損1の解消・給付> 異類が男に生じた欠損を解消する。
- IV. <反対給付・欠損2の発生> 異類のところへ娘が差し出される。
- V. <欠損2の解消> 差し出された娘が異類を殺して欠損を解消する。

「田螺息子」も「猿掣入」も、二つの欠損が順次、解決される過程として物語が組み立てられている。このうち、ともに欠損2とその解消の過程が「異類婚姻譚」としての話の中心となっている。この部分において両者に共通するのは「異類の(姿をした)男が人間の女との結婚を要求する」という枠組みである。この異類婚姻の要求に対して、「田螺息子」においては、異類の男が、人間界にやって来て、人間に変身し、人間の女との結婚が成就される。「猿掣入」においては、人間の女が、異類の世界に連れていかれる途中に(あるいは人間の世界に里帰りする途中に)、計略を用いて異類の男を殺し、異類の男との婚姻が解消される。このように同じ異類婚姻の要求に対して、「田螺息子」と「猿掣入」では、婚姻の成就と婚姻の否定というように反対の方向への解決が図られている。ここでは、「田螺息子」のように婚姻が成立する場合を「異類婚・婚姻成立型」、 「猿掣入」のように婚姻が成立しない場合を「異類婚・婚姻不成立型」というように、異類婚姻譚をまず大きく二つに分類することにしたい。すると、「田螺息子」は「婚姻成立型」の一類型、「猿掣入」は「婚姻不成立型」の一類型ということになる。

本稿では、このように婚姻の成立と不成立ということを基準に、異類婚姻譚を分析していくことにする。ではまず、「田螺息子」や「猿掣入」と同じく、「異類掣譚」の日本における類型から見定めることにしよう。

2 日本の異類掣譚の類型

『日本昔話大成』の「婚姻・異類掣」の項目で「婚姻成立型」に該当するのは、「田螺息子」と「蛙息子」だけである。また、このうち「蛙息子」は、『大成』には鹿児島県薩摩郡甕島の二つの事例があげられているだけで、その注において「型を決定するにはあまりにも類話が少ない」と述べられている。

前掲の「田螺息子」の基本的な展開は、次のように記述することができる。

- I. 異類の(姿をした)男が、人間の女との結婚を要求する。
- II. 異類の(姿をした)男が、人間に変身して、人間の女との結婚を成就する。

このように、異類が人間に変身するという形で異類婚姻が成就される類型を「変身婚姻型」というように下位分類しておくことにする。⁽²⁾

「婚姻成立型」が日本の異類掣譚の中には、これ以外に見当たらないのに対し、『大成』の「婚姻・異類掣」の項目には、「蛇掣入・芋環型」「蛇掣入・水乞型」「河童掣入」「鬼掣入」「蛙報恩」

「蟹報恩」など、「婚姻不成立型」に該当する多くの話型があげられている。このうち「蛇掣入・水乞型」は、事例3の「猿掣入」と基本的に同一の展開をとるものである。例をあげてみよう。

事例4 昔、長者が田に出かけてみると、水がすっかり干上がっていた。長者は大変困って「田に水をかけてくれる者がいたら、三人の娘の誰かを嫁にくれてやる」とつぶやきながら家に戻った。翌日、また田に出かけてみると、すべての田に水が張られていた。長者のひとりごとを聞いた蛇が、水を引いておいてくれたのであった。長者は困り果てて三人の娘に事情を説明したが、長女も次女も蛇の嫁にはなりたくない、と断った。しかし末娘は父親思いであったので、蛇の嫁になることを承知し、針千本とひょうたん千個とそれに真綿千枚を持って、蛇の待っている沼へ行った。娘は、ひょうたんの口に真綿をつめ、それに針を刺して一度に沼に投げ入れて、「ひょうたんをみんな沈めた者と結婚する」と言った。蛇は、ひょうたんを沈めようと泳ぎまわっているうちに、針が刺さって死んでしまった。

—青森県三戸郡—（関1978a:45-47）

この「蛇掣入・水乞型」は「猿掣入」と同様に、人間の女が計略を用いて異類の男を殺害することによって、異類との婚姻を解消している。ここでは、人間による異類の殺害のモチーフが重要な意味をもっているので、この類型を「殺害型」というように下位分類しておくことにしたい。

福田晃によれば、「奄美・沖縄方面の水乞型蛇掣入には、蛇掣との婚姻を否定せず、末娘とのめでたい結婚を主張する伝承グループ」が存在するという（福田1992 [1990]:458-462）。福田は「水乞型蛇掣入の古層」という論文で、この「蛇掣入・単純婚姻型」の事例を、奄美大島、喜界島、宮古郡伊良部島からそれぞれ1例ずつ、また長野県と香川県からも1例ずつ紹介している。奄美大島の事例は次のようなものである。

事例5 昔、お婆さんが畑に芋堀に出ていると、急に大雨が降って川が満水になり、渡って帰ることができなくなった。困って川のそばに立っていると、太い尾の切れたアカマタが出てきた。婆さんは、娘の一人をアカマタの嫁にやる、という約束をして、アカマタの背中に乗って川を渡してもらって、家に帰った。家に帰って婆さんがその話をすると、長女も次女も、アカマタの嫁になるのは絶対いやだ、と言って断ったが、末娘は、親の言うことなら仕方がない、と承知した。アカマタは背の高い好青年に化けて娘をもらいに来た。婆さんは嫁いで行く娘に小豆を一握り持たせて、道々それを落として行くように言った。その小豆の実のなる頃に婆さんがその小豆のあとをたどって行くと、山の中に立派な大きい家があって、そこでアカマタと娘は何不自由ない生活をおくっていたそう⁽³⁾だ。だから、親の言うことは聞けという話だ。

—鹿児島県大島郡—（福田1992 [1990]:458-460）

福田は、この「単純婚姻型」を水乞型蛇掣入の古層に属するものと考えている。つまり、「蛇掣入・単純婚姻型」の伝承は、大いなる自然の象徴なる蛇体を、人間の至福を将来する存在と観じ、その聖なる存在の社会を、俗なる人間社会の一続きの地平に認める精神風土に支えられてきた」として、「奄美・沖縄地方は、中国の一部ともども、かかる思想を近年まで、相当強く維持して

きた」というように解釈している(福田1992 [1990]:466-467)。本稿では、このような解釈が妥当なものであるかどうか、吟味するだけの準備がない。ただ、事例5のような「単純婚姻型」の伝承が、日本本土から奄美・沖縄方面に散在しているにしても、少なくとも現在の伝承としては、「殺害型」が伝承の事例数において圧倒的に優位であることは確認できる。しかし、福田の示すような「単純婚姻型」の事例の存在は、蛇舂入の類型の歴史的背景の考察をする上で重要な問題を提起していると思われるので、別の機会に考察することにした。

さて、日本の異類聾譚の類型をまとめてみると、次のようになる。「猿舂入」と「蛇舂入・水乞型」は、日本において非常に伝承の類話数が多いものである。約6万話の昔話を収録した『日本昔話通観』全29巻における類話数をみると、「猿舂入」が672話、「蛇舂入・水乞型」が401話である。⁽⁴⁾ それに対して、「田螺息子」の類話は89話、「蛙息子」が8話である。日本における異類聾譚の「婚姻成立型」と「婚姻不成立型」の類話数を比較すると、「婚姻不成立型」の伝承がかなり優位であることがわかる。

では次に、韓国における対応する類型の伝承との比較をおこなってみることにしよう。

3 韓国の異類聾譚の類型

韓国の異類聾譚には、「婚姻成立型」に該当するものとして「ひきがえる聾」と呼ばれる話型がある。これは、日本の「田螺息子」の「田螺」を「ひきがえる」に置き換えた形になっている。例をあげてみよう。

事例6 漁師の爺が、ある日一匹の魚もとれずに家に帰る途中、一匹のひきがえるが自分を家に連れていってくれ、と声をかけてきた。ほんの少しの食べ物でいいと言うので、爺は家に連れて帰った。数日後、ひきがえるは爺に、自分を息子にしてくれと頼んだ。爺は承知した。次にひきがえるは、大監様の家の三番目の娘を嫁にすると言い出した。爺は無理だと警告したが、ひきがえるは翌晩、大監様の家に出かけ、神の使いのふりをして大監をだまし、三番目の娘を嫁にやることを承知させた。結婚初夜に、ひきがえるは花嫁に、はさみで背中中の皮を切ってくれ、と頼んだ。花嫁が言われた通りにすると、まぶしいほどの美しい若者があらわれた。花聾は、爺を呼んで改めて親子のちぎりを結んだ。その後、夫婦はとても幸せに暮らしたという。

—江原道原城郡—(崔編著1974:82-86)

韓国においては、1980年から88年にかけて『韓国口碑文学大系』全82巻が刊行され、その中には、1万5107編の口承説話(昔話・伝説・神話をすべて含む)が収録されている。別冊の『説話類型分類集』の分類項目でみると、「ひきがえる聾」の類話は6話収録されている。⁽⁵⁾ 韓国の「ひきがえる聾」については、日本の事例との比較研究においてしばしば言及されるが、日本における昔話収集との量的な規模の差を考慮に入れるにしても、今のところ、韓国においてそれほど類話数の多い話型とはいえないようである。日本の「田螺息子」と比較すると、花嫁がひきがえるの

背中を皮をはさみで切ると、中から美しい男があらわれるという形になっているところが特徴的である。また、日本の「田螺息子」のように、冒頭に神様に願掛けして子どもを授かるという「申し子」のモチーフがあらわれることがないことも日本の伝承との違いの一つである。しかし、基本的な筋の展開は日本の「田螺息子」と同一であるので、「田螺息子」と同じく、「変身婚姻型」に分類しておいてよいであろう。

さて、この「ひきがえる髯」のほかに、「婚姻成立型」にあたる話型として「クロンドンドン・シンソンビ(青大将髯)」と呼ばれているものがある。これは韓国において幅広く伝承されている昔話である。

事例7 昔、貧しい老婆が青大将を生んだ。隣の長者の三人の娘が、老婆が子どもを生んだという噂を聞いて、見に来て来た。上の二人の娘は悪口を言って帰ったが、末娘は「クロンドンドン・シンソンビ(青大将髯の俗称)を生みましたのね」と言って帰っていった。やがて、青大将の息子は成長して、隣の長者の末娘を嫁にもらいたいと母にねだった。母が長者の家を訪ねてこのことを伝えると、長者は三人の娘にたずねてみた。上の二人は断ったが、末娘は父親に従うと言って断らなかった。それで、長者は末娘を嫁にやることにした。結婚初夜に花髯は青大将の皮を脱いで、見たこともない美男子になった。花髯は、その脱けがらを花嫁にあずけて、「これは誰にも見せてはいけない」と念を押した。そして、あくる朝早く、どこかへ出かけて行った。そのすきに姉たちがやって来て、脱けがらを見せてくれとつこくねだるので、花嫁はやむなく見せてあげた。すると、姉たちは、その脱けがらを火鉢に入れて焼いてしまった。花髯は帰ってくると、「約束をやぶったから、これ以上いっしょにいることはできない」と言い残して旅立ってしまった。花嫁は髯をさがしに出かけた。途中で、田を耕す仕事、そして老婆に頼まれた大量の洗濯をなしとげ、老婆に火搔きをもらって、それに乗って竜宮に向かった。花髯は竜宮に住んでいたが、すでに二人の後妻がいた。花髯は二人の後妻もとの花嫁に、生きた虎のまゆげを三本抜きとってくるという難題を出した。二人の後妻は猫のまゆげを持ってきたが、もとの花嫁は老婆(山の神)の助けで、虎のまゆげを得ることができた。花髯はさらに、冬の山の中から山ぶどうを取ってくるという二番目の難題を出したが、もとの花嫁だけが、また老婆の助けで成功した。それで、花髯は二人の後妻を追い出して、もとの花嫁と末長く幸せに暮らしたという。

一忠清南道青陽郡一(崔編著1980:8-13)

この「クロンドンドン・シンソンビ(青大将髯)」の類話は『韓国口碑文学大系』の中に49話収録されている。類話の数から言っても、韓国においてかなりポピュラーな昔話と考えることができる。この話では、「ひきがえる髯」の場合と違って、老婆が青大将を生むという形になっている。しかし、なぜ老婆が青大将を生むようになったのか、その理由は明らかではない。そして、結婚初夜に花髯が青大将の皮を脱いで、美しい人間の男の姿になる。ここまでの展開は「ひきがえる髯」の場合と基本的に同一であるが、このあとに後半の展開が続いている。青大将髯が脱いだ皮が、花嫁の姉たちによって焼かれてしまうことによる花髯の家出、追いかける花嫁への難題、

その解決、最後に再び夫婦の結び付きを回復するというように、話は展開する。この後半部分も含めた全体の展開として考えると、青大将が人間に変身して結婚を成就した後に、別離と再会のモチーフを含んでいるので、「変身婚姻・再会型」というように下位分類することにする。

この「変身婚姻・再会型」は、日本の口承の異類譚の昔話には見られない構成である。しかし、日本では御伽草子の『天稚彦草子』が、この「青大将譚」ときわめて類似した話の展開となっている。『天稚彦草子』のあら筋をあげておこう。

事例 8 昔、長者の家の前で、下女が洗濯をしていると、大蛇があらわれ、口から手紙を吐き出して、長者に渡すように、と言う。長者が開けてみると、娘を嫁にくれ、さもないと父母を取り殺す、という手紙であった。長者がこれを告げると、長女も次女も絶対いやだと断ったが、末娘は父母を哀れんで大蛇の嫁になることを承諾した。大蛇の言いつけどおり、末娘を池の前の釣殿に置いて皆は去った。亥の刻の頃になると、大蛇があらわれて「恐れることはない、持っている刀で私の頭を切れ」と言う。そこで爪切刀で切ると、蛇の皮の中から直衣を着た美しい男が走り出た。二人は唐櫃の中に入って夫婦になった。ある日、その男が「私は海龍王であるので、近いうちに用事があって天に昇らねばならない、二十一日待って帰らないときは、西の京の女のもとに行って、一夜ひさごというものに乗って昇ってこい」、そして「この唐櫃を決して開けるな、開けると自分は戻れなくなる」と言って天に昇った。姉たちがやって来て、無理やり唐櫃を開けると、中には何もなく、煙が空へ昇っていった。二十一日待っても戻ってこないのので、末娘は一夜ひさごを手に入れて天に昇った。末娘は、道を尋ねながら、ついに天稚彦に再会し、さらに深い契りを交わした。天稚彦の父親は鬼で、幾日かしてやって来て、人間臭いと嗅ぎまわった。このとき天稚彦は娘を脇息に変化させてしのいだが、やがて発見され、娘は鬼に連れ去られた。娘は、牛の世話をさせられたり、米俵を運ばされたり、いろいろな試練を課されたが、天稚彦から教えられた知恵によって、それを切り抜けた。鬼がやむを得ず、「月に一度、二人が会うことを認める」と言うと、娘は「年に一度」と聞きそこなったので、二人は七夕・彦星として、年に一度、七月七日に会うことになった。

—「天稚彦草子」『御伽草子集』— (松本校注1980:77-85)

蛇の頭を刀で切るところ、タブーとされる対象が唐櫃であること、天上で課される難題の内容、最後に年に一度しか会えなくなる点などが、韓国の「青大将譚」の場合と異なっているが、筋は基本的に重なり合っている。先ほどの両国の類話の伝承状況を見ると、韓国においては、この「青大将譚」の話型が口承の昔話として定着しているのに、日本においては、このように文献に残るのみで、口承の昔話としては、この話型が民間に定着することはなかったようである。日本には、この話型が民間に定着しにくい何らかの理由があったのであろう。⁽⁶⁾ その理由を考察するためには、この型の説話の歴史的、そして信仰的な背景を考えていかねばならないが、ここでは、まず、そのような考察の前提として、両国の諸類型の伝承状況を整理することに力を注ぐことにしたい。

韓国の他の異類婚姻譚で、幅広く語られているのが、「夜来者説話」と呼ばれる類型である。例をあげてみよう。

事例9 ある金持ちの家に結婚適齢期のひとり娘がいたが、らい病にかかり、村はずれに仮小屋を建てて住んでいた。ある夜、どこからか正体不明の青年が娘のところに忍んで来て、夜明け前に去って行った。その後、それが繰り返されるようになり、やがて娘は妊娠した。母親が心配して娘にたずねると、娘は、男が忍んで来るがその正体を知ることができないと事情を説明した。ある夜、娘は糸まきと針を準備しておき、明け方、男が立ち去ろうとするとき、糸を通した針を男の着物のすそに刺しておいた。翌朝、母といっしょにその糸をたどって行くと、ある池の中に糸がはいっていた。糸をひっぱってみると、糸の先に大きな貝がくっついていて、その貝が人間の姿になって、娘のところへ忍んで来ていたのであった。娘はやがて男の子を生んだが、それとともにらい病はすっかりなおってしまった。生まれた男の子は、体が丈夫で大変才能があり、よく勉強して官職にもつき、曹氏の始祖となったという。だから曹という姓をもつ人びとは貝の子孫なのである。その貝を埋めた墓も近くに実在している。

—慶尚北道月城郡—（趙編1980:450-454）

この話の筋の展開の基本的な枠組みを示すと次のようになる。

- I. <欠損1の発生> 娘のもとに正体のわからない男が通ってくる。
- II. <計略> 男の着物の裾に針を刺す。
- III. <欠損1の解消> 男の正体が蛇であることがわかる。
- IV. <結末> 生まれた子どもが偉い人物になる。

この類型は、日本においては「蛇簞入・苧環型」と呼ばれている。ただし、話の結末は妊娠した子どもを墮胎する形の展開になるものが多い。例をあげれば次のような形のものである。

事例10 あるところに器量のいい娘があったが、その娘のところにどこからか男が忍んで来るようになった。親が感づいて娘に「今夜来たら、縫物針をすそに縫いつけておけ」と言った。娘は縫物針を枕の下に隠しておき、男がやって来ると、そっとわからないように着物のすそに縫物針を刺した。すると、男はキャーッと声をあげて飛び出して逃げて行った。次の朝、娘の母親が血のあとをたどって行ってみると、洞穴の中から唸り声をした。耳をすまして聞いてみると、中から「人間なんかにかまうから罰が当たったんだ」という声をした。するとその子どもが「子どもを残してきたから心配ない」と答える。魔物の母は「人間は利口だから、五月節供の菖蒲湯に入れば、その子は碎けてしまう」と言う。それを聞いて家に帰り、娘を菖蒲湯に入れると蛇の子がみんな下った。

—新潟県栃尾市—（関1978a:15-17）

事例9でも事例10でも、異類と人間の間の婚姻は成立しない。したがって、ともに「婚姻不成立型」である。その下位分類としては、事例9の型を「子孫誕生型」、事例10の型を「墮胎型」と呼ぶことにしよう。それ以外に、娘が妊娠しない形の伝承の類型もある。

韓国においては、事例9のような「子孫誕生型」の伝承が多い。『韓国口碑文学大系』には、「夜来者説話」の類話が21話収録されている。このうち、「子孫誕生型」が16話、妊娠のモチーフをもたないものが3話、蛇の形をした子どもを生むものが1話、娘が妊娠するが薬を飲んで墮胎するものが1話である。

日本において、事例10の「蛇髯入・苧環型」は非常に幅広く伝承されている話型である。『日本昔話通観』には類話が499話収録されている。しかし、そのうち子どもが生まれて出世する型は13話のみである。

このような伝承資料の種類の違いは、韓国の『口碑文学大系』が昔話と伝説を一括してあついているのに対し、日本では昔話と伝説をはっきり区別して収集しているという資料集の性格の違いも考慮しなければならない。なぜなら、日本における「子孫誕生型」はおもに伝説の形で語られていて、『日本昔話通観』には収録されていないものが多いからである。日本において昔話と伝説を合わせて分析したら、どのような種類の比重になるか、今回の考察からはその結果をつかむことはできない。しかし、『通観』における「蛇髯入・苧環型」の499話という伝承状況を見ると、少なくとも、「墮胎型」の伝承が日本においてきわめて幅広く語り伝えられている状況は知ることができる。そして、この点は韓国の伝承状況と異なる点であることを指摘できる。

では、韓国においては、日本の「猿髯入」や「蛇髯入・水乞型」においてきわめて顕著な形であられる「殺害型」に対応する形の伝承は存在しないのであろうか。先の「夜来者説話」においては、男の正体を確かめるために、その着物の裾に針を刺しておく、そのために異類の男が死んでしまう形の語り方が、かなり広く存在している。しかし、日本の「猿髯入」や「蛇髯入・水乞型」のように、人間の側がはっきりした殺意をもって、異類を殺害する形の類型は、韓国には存在していないようである。この点は、日本の伝承と韓国の伝承との大きな違いである。類話数から言っても、韓国の異類髯譚においては「婚姻成立型」の伝承が「婚姻不成立型」の伝承に対して、かなり優位に立っている。日本の場合と比較すると、異類の男と人間の女の婚姻を肯定する形の伝承が多いことが指摘できる。

では次に、異類の女と人間の男の婚姻をあつかう「異類女房」の系統の昔話に目を移すことにしよう。

4 異類女房譚の類型

韓国には、異類髯譚の場合と同様に、異類女房譚においても「変身婚姻型」の伝承が存在する。一つは「田螺女房」という話型である。例をあげてみよう。

事例11 昔、ひとり暮らしの男がいた。ある日、稲をながめながら、「稲はよく実ったが、一体わたしは誰と暮らしたらよいだろう」とひとりごとを言うと、どこからともなく、「わたしと暮らしたら」という女の声が聞こえてきた。声の主が見つからないので、三度繰り返したが、

やはり同じ返事がかえってきた。それで、声が聞こえてくるあたりをよく探してみると、一匹の田螺がいた。彼はその田螺を家にもって帰り、水瓶の中に入れておいた。あくる朝、起きてみると、今までに見たこともないごちそうが準備されていた。夕方にも、また食膳が準備されていた。毎日それが繰り返されるので、誰の仕業かたしかめようと、ある日彼は仕事に出かけるふりをして様子をうかがっていた。すると、水瓶から田螺が出てきて、美しい娘になって御飯を炊きはじめるのであった。彼は娘に駆け寄り、抱きしめて、「このようにめぐりあえたのも、何かの縁だから、いっしょに暮らそう」と言った。そして、二人は夫婦になって幸せに暮らしたという。

—全羅南道求礼郡—（崔編著1980:154-155）

この話は、日本の「田螺息子」や韓国の「ひきがえる髻」における男と女の役割を逆にした形の筋の展開になっている。話の基本的な枠組みを示すと次のようになる。

I. 異類の（姿をした）女が、人間の男との結婚を要求する。

II. 異類の（姿をした）女が、人間に変身して、人間の男との結婚を成就する。

事例11では、田螺が殻を脱いで人間になるという「変身の達成」のモチーフが明示されていないが、その後夫婦として幸せに暮らしたという叙述を見ると、「異類が人間に変身を遂げる」という枠組みをもつものと考えていいと思われる。しかし、韓国の「田螺女房」には、事例11のような、田螺が人間に変身してそのままハッピーエンドになる形の伝承ばかりではなく、一旦結婚生活にはいった後に権力者が女房を奪おうとして難題を課する形の伝承もかなり多い。たとえば、次のような事例である。

事例12（発端部は事例11と同じ） 若者がある日、仕事に出かけるふりをして外から家の中をのぞいてみると、水瓶の中から田螺が出てきて美しい娘に化けて料理をつくるのであった。若者が出て行って娘の手を握ると、娘は「時が来るまで、ほっておいて下さい」と言う。しかし、若者は応じず、娘を妻にし、しばらく幸せに暮らした。ある日、王様がこの村へ狩りに来て、この女房が好きになり、若者から奪い取ろうとたくらんで、若者を呼びよせた。山にある木を全部伐る競争、馬に乗って川を渡る競争を、王様は若者に提案した。若者は、妻の指図によって、竜宮を訪ね、竜王の呪術的な援助によって勝利をおさめた。王様は、今度は船に乗って海を渡る試合を提案した。試合が始まり、王様の船は台風にあってひっくりかえり、王様は溺れ死んでしまった。大臣たちは若者を王様として迎え、田螺女房は王妃となって幸せに暮らした。

—ソウル市—（崔編著1974:75-79）

このような展開をもつ類型を「変身婚姻・難題型」と下位分類することにする。また他に、田螺が人間に変身して結婚した後、権力者に女房を奪われて、男が悲しんで憤死したりする伝承もある。これを「変身婚姻・離別型」と呼ぶことにしよう。

「田螺女房」の類話は『韓国口碑文学大系』に33話収録されている。そのうち、「変身婚姻型」が9話、「変身婚姻・難題型」が12話、「変身婚姻・離別型」が11話、結末不明のものが1話である。「変身婚姻・離別型」は一旦婚姻が成立した後に婚姻が破綻する形なので、「婚姻成立型」と

「婚姻不成立型」の中間に位置づけられる類型である。

日本の「竜宮女房」という話型は、この「田螺女房」の「変身婚姻・難題型」とほぼ同一の展開をとるものである。例をあげてみよう。

事例13 家族がみんな死んで、母と末の弟が二人で暮らしていた。この弟は花売りをしていて、ある日、花が売れ残ったので「竜宮の神様に差し上げましょう」と言って、海の中に投げ込んだ。すると亀が出てきて、男を竜宮へ連れていった。竜宮で三日間遊んで帰るとき、神様が「何がほしいか」と聞くので、男は、亀の教え通り「あなたの娘がほしい」と答え、娘を嫁にもらって帰った。帰ると、嫁が竜宮から持ってきた打ち出し小槌というものを振って、立派な家と米と倉を出し、男は一瞬にして大金持ちになった。嫁は大変美しかったので、殿様が自分のものにしようと男を呼び出した。殿様は「千石の米を差し出せ」、また「千尋の縄を納めよ」という難題を出したが、男は嫁の知恵で切り抜けた。すると次に殿様は、正月元旦に699人の家来を連れて御馳走を食べにやって来た。殿様が「何か芸能を見せろ」と言うので、妻が小箱を開けると、鉢巻きをした何百人という侍が出てきて、刀を振って殿様と家来をみんな切り殺してしまった。

—鹿児島県大島郡喜界島— (関1978a:193-195)

「竜宮女房」の類話は『通観』に27話収録されており、そのうち5話が結末で夫婦が離別する型である。日本の昔話の話型としては、それほど類話数の多いものではない。また伝承の分布においては、鹿児島県下の離島からの報告が多いのが特徴である。

「竜宮女房」の女房は、「異類女房」といっても竜宮に住んでいた美しい女であり、動物の姿をとってはいない。したがって、韓国の「田螺女房」の場合のような「人間への変身」のモチーフはない。つまり、日本の「竜宮女房」は基本的に「婚姻成立型」であるが、「変身婚姻型」ではない。これを「難題婚姻型」と名づけておくことにする。この類型を日本の伝承の中にどう位置づけるかは日本の異類女房譚を考える上で問題となる点であるが、今回は、異類婚姻譚の中でも、動物の姿をとったものと人間との婚姻のモチーフをもつものを考察の対象とすることにして、この「竜宮女房」はここでの議論の周辺に位置づけておくことにしたい。

韓国の異類女房譚で特に類話数の多いのが「むかで女房」の話型である。次のような話である。

事例14 昔、塩商人が行商の途中で日が暮れてしまった。そのあたりに小さな瓦家があったので、泊めてもらおうと思って訪ねていくと、若い娘がいて泊めてくれ、食事を出してくれた。そして、行商人は結局そのまま、その娘といっしょに暮らすようになった。ある日、草笠をかぶった若者が訪ねてきて、「お前は十年の年を食ったむかでと暮らしているんだ。だから、そいつを殺せ」と言う。それに対して、娘は「草笠をかぶった若者がそう言ったのだろう。それなら、そいつを洞窟の中に連れて行って、火をつけてやれ」と言う。それで行商人は、若者を洞窟に連れて行って火をつけると、若者は大声で叫びながら焼け死んでしまった。その姿を見ると、大きなむかだが仰向けになって倒れていた。むかだが化けていたのだ。娘も実はむかでであったが、その後、むかでの皮を脱いで完全な人間となり、行商人の男と幸せに暮らした。

—忠清南道大徳郡— (朴編1981:548)

ここでは、むかでが皮を脱いで人間になるという「変身」のモチーフが明示されている。その点で「田螺女房」の場合よりも、より明確に「変身婚姻型」の類型であることを示している。このように事例14の「むかで女房」は明らかに「変身婚姻型」であるが、むかでが結局人間になることができずに（あるいは天に昇ってしまっ）、人間の男との結婚生活を続けることができない「変身失敗・離別型」の類型になるものも数多くある。『韓国口碑文学大系』には「むかで女房」の類話が68話収録されており、「変身婚姻型」が21話、「変身失敗・離別型」が47話である。「婚姻不成立型」のほうがより広く伝承されているが、「変身失敗・離別型」の場合でも、むかでが人間になって人間との結婚生活を成就する潜在的な可能性が「変身婚姻型」の場合と同じような形で示されている点が、次に示す日本の異類女房の「禁忌・離別型」の場合とかなり異なっている。では、日本の異類女房譚の主要な部分を占める「禁忌・離別型」の例を見てみよう。

事例15 貧乏な若者が田打ちをしていると、背中に矢のささった鶴がいた。若者が矢を抜いてやると、うれしそうに飛んで行った。二、三日後の夕方、美しい女が来て宿を乞い、家に泊まった。さらに、二、三日たつと、その女は嫁にしてくれと言って、そのまま居ついた。嫁は、金もうけするから、と六尺四面の機場を作らせ、決して中をのぞくな、と夫に言い、美しい布を織りあげた。夫は女房に言われた通り、都に行き、それを高い値段で売ってきた。そして、夫は欲が出て、嫁にもう一反織らせた。その途中、夫は好奇心から機場をのぞくと、鶴が自分の毛を抜いて、機を織っていた。鶴は、夫に気づくと、姿を見られたから、もうここにはいられない、と言って、飛び去った。

—新潟県両津市— (関1978a:214)

この話は、次のような枠組みのもとに展開している。

- I. 助けてもらった恩返しのため、異類の女が人間の男のところに来て女房になる。
- II. 異類の女の正体が露見したため、人間の男との婚姻が解消される。

この話型では、異類の女が人間の男のところによって来て結婚生活をおくることが、結局その正体は異類（動物）のままであったため、異類のほうから進んで去って行く。したがって、一定期間、人間との結婚生活をおくっているといっても、韓国の「田螺女房」や「むかで女房」の場合のような「人間への変身の達成」のモチーフをもっているわけではない。この類型は、必ずしも禁忌とその違反のモチーフをもつわけではないが、「異類の女の正体が露見したため結婚が破綻する」という展開を必ずもつことに注目して、「禁忌離別型」と呼んでおくことにしよう。「蛇女房」「狐女房」「蛙女房」「蛤女房」「魚女房」など、日本の異類女房譚の大部分が、この「禁忌離別型」に当たる。ただし、「蛇女房」「狐女房」などは「子どもが生まれる」というモチーフを含んでいる。

では、日本においては「人間への変身の達成」のモチーフをもつ異類女房譚は存在しないのだろうか。『日本昔話大成』には「猫女房」という項目があり、佐々木喜善の『聴耳草子』に「猫の嫁子」という題で収録されている話が例話として掲げられている。次のような話である。

事例16 あるところに百姓がいた。貧乏で四十を過ぎてもまだ独り者であった。夜半に外でしきりに猫のなき声がするので、不憫に思って飼うことにした。ある夜、百姓は「お前が人間で、留守番している間に麦粉でも挽いておいてくれたら、生活が楽になるのに」と言いながら、猫を抱いて寝た。すると翌日、百姓が仕事から帰ると、猫がごろごろと挽臼を挽いていた。百姓と猫はその夜、小麦団子を作って食べた。ある晩、猫が「伊勢参りをして人間になりたい」とせがむので、言う通りに旅に出させた。猫は首尾よく伊勢参りをし、帰りには神様の功德で人間の姿になった。そして百姓と夫婦になって、よく働き、二人は長者になった。

—岩手県遠野市— (関1978a:231-232, 佐々木1964 [1931] :182-183)

ここでは明らかに、「人間への変身の達成」のモチーフが、物語の大きな枠組みとなっている。しかし、『大成』のこの項目には類話の一つ出ているだけで、それも話の展開が異なり、猫が女に化けてくるが、また猫の姿に戻って去って行くという形のものである。つまり、『聴耳草子』所載のものが、人間への変身を達成する形の「猫女房」の唯一の事例となっている。この「猫女房」に関して、関敬吾は次のように述べている。

「我が国の異類婚姻譚をヨーロッパの同種の昔話と比較すると、我が国の伝承はほとんど人間の形態をとって婚姻関係を結ぶが、ほとんど人間によって両者の間で守られねばならない規範が破られ、破局に終わる。異類の姿に還って去って行く。ヨーロッパの伝承はほぼこれと逆の形式をとっている。田螺蛸は最初動物として人間の女性と結婚するが、結婚することによって人間の姿に還る。ヨーロッパの伝承と共通する例である。このほかに岩手で記録された猫女房が人間に転化する例であるが、大正末期採集で、まだ類話は発見されない。」(関1978b:24)

ここで関が確認しているように「猫女房」の話型は、日本においては孤立した伝承となっている。先ほどの『天稚彦草子』の場合と同じように、この話型についても、日本の民俗社会に受け入れられにくい何らかの理由があるものと考えられる。このようにして見てくると、日本の異類女房譚には「変身婚姻型」の類型は存在していないと考えるのが妥当なようである。

では次に、韓国の異類女房譚の中で「禁忌離別型」に該当するものについて見てみることにしよう。「龍女」という型の伝承が、日本の「鶴女房」の場合に相当するような禁忌と離別という枠組みのもとに話が展開するものである。

事例17 高麗の太祖の祖父の妻は龍女であった。彼女は大井という井戸を掘って、西海の竜宮に通ったという。この龍女は常に夫に向かって「私が竜宮に戻るときには決して私の姿を見てはいけない。もしこの約束を破ったら私は永遠に帰ってこない」と言っていた。ある日、夫がこっそり彼女の行動をのぞくと、彼女は侍女とともに黄色い龍になって井戸に入り、そこから五色の雲があらわれた。夫はびっくりしたが黙っていた。龍女は帰ってくると、「あなたが約束を破ったので、私はここにいられなくなった」と大変怒った声で夫に言い、侍女といっしょに龍になって井戸に飛び込んだまま、帰ってこなかった。

—京畿道開城府— (崔編著1977:16-17)

この禁忌を破ったため龍の女房を失うという形の話は、『韓国口碑文学大系』に8話収録されている。事例17からもわかるように、伝説の形で語られているものが多い。先にあげた「田螺女房」や「むかで女房」の話型と比べて、韓国においてあまり類話の多い話型とはいえない。これまで管見に及んだところでは、韓国にはこれ以外に、まとまった形での「禁忌離別型」の伝承は存在しないようである。

次に、これも主に伝説の形で伝えられているものであるが、「熊女房」の形の話がある。

事例18 ある日、青年が山で道に迷い、空腹で歩けなくなって洞窟の前に座っていると、一人の娘が通りかかった。食べ物をくれないかと頼むと、どこからか鹿の肉と果物を持ってきてくれた。力を取り戻した男は、娘に好感をいだき、彼女といっしょに暮らすようになった。そのうち、男は彼女の行動を不審に思いはじめ、ある日、後をつけてみた。すると、何と彼女はいきなり大きな熊に化け、鹿を追うのであった。男はこの光景を見て、びっくりして逃げ出し、走って山を降りていった。しばらく行くと、後ろから呼ぶ声が聞こえたが、男はそのまま走り続けた。熊が男に追いつく寸前になったとき、男は絶壁に立っていた。下は錦江である。男は熊に食われるよりはましだと思って飛び降りた。熊もつづいて飛び降りた。男は泳いで岸にたどり着いたが、熊は泳げずに溺れ死んでしまった。だから、このあたりをコムネ（熊川）、コムナル（熊津）と呼ぶようになった。

— 一忠清南道公州郡一（崔編著1977:86）

この話は、一旦異類の世界で結婚生活をおくるが、そこから逃げ出してくるという形の話である。この「熊女房」の形の話は『韓国口碑文学大系』に11話収録されている。日本の異類女房譚の中にはこのような形の話は見当たらないが、『日本昔話大成』で「逃竄譚」という項目（関1978 c:131-293）に収められている「鬼の子小綱」は、人間の女が鬼の世界で一定期間いっしょに暮らした後に逃げ出してくる話である。つまり、日本では、異類譚の中にこのような類型の話が存在している。韓国の「熊女房」の話は、やはり「婚姻不成立型」に含まれる。その下位分類として「婚姻逃竄型」と呼ぶことにしよう。

韓国の伝承で、異類の女房と結婚してすぐれた子どもを生むことを内容の骨子とするものに「狐女房」の話がある。これは主に高麗の名将である姜邯賛という人物の出世譚として語られている。

事例19 ある男が山道に行く途中、暴風雨に会い、灯りの見えた一軒家に駆け込んだ。すると、一人の美しい娘が出迎えて、歓待してくれた。男は三日間、その女の家で厄介になった。その間に二人は体の関係ももった。家に帰って数日後に再び訪ねて行ったが、その家は見えなくなっていた。数年後、女が子どもを連れてきて、「先年、あなたが嵐に会って訪ねてきた家は狐の家だったのです。この子どもはそのときできたあなたの子です。きっと偉い人物になるでしょうから大事に育ててください」と言い残して姿を消した。はたして、その子どもは後日偉い人物になったが、それがすなわち姜邯賛であった。

—忠清北道槐山郡— (孫1966 [1930] :110-111)

非凡な人物の出生を語る点では日本の「狐女房」と同様であるが、狐が男のところに訪ねてくるのではなく、男が狐の家に泊まることになる点、そして狐と男の同居の期間が短く、異類と人間との関わりが一時的である点が、韓国の「狐女房」の特徴となっている。この話の類話は『大系』に19話収録されている。ある程度の伝承の広がり示しているが、この話では「異類との婚姻」というモチーフについての語りはかなり簡略なものになり、生まれた子どもに対する記述のほうに重点が移行している。これも「婚姻不成立型」の「子孫誕生型」であるが、「夜来者説話」の場合と違って、人間の男が出かけて行って、狐の女と交わる形になっている。人間界と異類界の間の動きに着目して、「夜来者説話」を「子孫誕生型 a」、韓国の「狐女房」を「子孫誕生型 b」というように下位分類することにしよう。

あと一つ、韓国には「虎女房」の形の伝承がある。これは『三国遺事』巻五・感通第七に所収の「金現感虎」の説話が、ほぼそのまま民間に伝えられたものようである。次の事例は、虎願寺の由来の伝説の形で語られているものである。

事例20 新羅には三月に慶州の興輪寺に集まって、殿塔をまわりながら福会をする風俗があった。金現という青年が塔をまわっていると美しい娘と目が合い、二人は情を通じた。娘が帰るとき、男は無理やり娘の家までついて行った。家で娘が老婆に事情を説明すると、老婆は兄たちに気づかれないようにと、男を奥まったところに隠した。まもなく三頭の虎があらわれて「人間くさい」と言い出したが、天から「お前たちのうち一頭を殺して罰を与える」という声があったので、娘が、自分が罰を受けるので兄たちに逃げるように言った。それで、三頭の虎は逃げて行った。娘は金現に「実は私は人間ではなく虎です。天の神が兄たちを罰するということで私が代わりにその罰を受けることにしました。私は明日、市に行って人間を脅かしますから、あなたはそれを退治して、官職を得るようにしてください。あなたに恩返しをしたいのです。私が死んだら、私のために寺を一つ建ててください」と言い残して、二人は泣きながら別れた。翌日、市に虎があらわれ、懸賞がかかった。金現は、言われた通りに、それを退治した。金現は高い位に雇われた後、虎願寺という寺を建てて、虎の冥福を祈った。

—慶尚北道慶州市— (崔編著1977:304-305)

この話は、先の「狐女房」の場合と同様、婚姻とみなされる期間が短く、報恩のモチーフを中心とする話に傾いている。『大系』にはこの話の類話が11話収録されている。話の舞台である慶尚道地域を中心に伝承が分布している。これも「婚姻不成立型」であり、「犠牲報恩型」と下位分類することにする。

このほかに、韓国においても日本においても数多く語り伝えられている話型に「天人女房」がある(韓国では「仙女ときこり」と呼ばれている)。これも人間の男と結婚する女が天上の世界の存在であるので、やはり「異類女房譚」の一類型と考えられる。類型としては、日韓ともに「離別型」「再会型」「難題型」の三つに別れるようである。

この話型はしかし、女房が他界から来た存在であることは明示されているものの、動物の姿で出現することはないので、「竜宮女房」の場合と同様、今回の考察からは一応はあしからずしておく。『韓国口碑文学大系』における類話数は44話、『日本昔話通観』における類話は211話で、ともに幅広い伝承をもつ話型であり、「異類女房譚」を全体的に考察するためには欠かすことのできないものである。いづれ稿を改めて「天人女房」の類型の分析をおこなうことにしたい。

以上、管見に及んだ限りでの韓国の異類女房譚の類型をあげてきた。特徴として、日本に顕著に見られる「禁忌離別型」の伝承があまりあられわれず、「変身婚姻型」の伝承がかなり数多くあらわれることが注目される。では、最後に異類聳譚の場合と合わせて、その類型を整理してみることにしよう。

5 諸類型の整理

これまで論じてきた異類聳譚と異類女房譚のそれぞれの類型を整理すると、下の表のようになる。類型名の右側には、人間界と異類界の間を人間あるいは異類がどのように移動するかという図式を示した。この類型表における分類の第一の基準は、「婚姻成立型」か「婚姻不成立型」か、ということである。そして次の基準として、日本と韓国のそれぞれの伝承を「異類聳譚」と「異

表 異類婚姻譚の類型

	類型名	移動	日本（『日本昔話通観』）			韓国（『韓国口碑文学大系』）		
			異類聳	異類女房		異類聳	異類女房	
婚姻成立型	単純婚姻型	人間界→異類界	蛇聳入・水乞型の一部	5話				
	変身婚姻型	人間界←異類界	田螺息子 蛙息子	89話 8話	(猫女房) 1話	ひきがえる聳 6話	田螺女房 a むかで女房 a	9話 21話
	変身婚姻・再会型	人間界⇄異類界	『天稚彦草子』 (文献)			青大将聳 49話		
	変身婚姻・難題型	人間界←異類界					田螺女房 b	12話
	婚姻難題型	人間界←異類界			竜宮女房 27話			
婚姻不成立型	子孫誕生型 a	人間界←異類界	蛇聳入・芋環型の一部	13話		夜来者説話 16話		
	子孫誕生型 b	人間界⇄異類界					狐女房	19話
	墮胎型	人間界←異類界	蛇聳入・芋環型	277話		夜来者説話 1話		
	計略殺害型	人間界←異類界	猿聳入 蛇聳入・水乞型	672話 401話				
	禁忌離別型	人間界⇄異類界			鶴女房 167話 蛇女房 159話 狐女房 211話		龍女房	8話
	変身失敗・離別型	人間界⇄異類界					むかで女房 b	47話
	変身婚姻・離別型	人間界←異類界					田螺女房 c	11話
	婚姻・逃竄型	人間界⇄異類界	鬼の子小綱	28話			熊女房	11話
	犠牲報恩型	人間界←異類界					虎女房	11話

類女房譚」に二分して、類型の記述をおこなった。「単純婚姻型」は、先に述べたように福田晃がその存在を指摘したものであるが、人間界と異類界の間の移動の仕方として理論的にも当然想定されるものである。「婚姻成立型」の中のこの「単純婚姻型」の位置づけについては、今後、資料の分析を積み上げて、明らかにしていく必要がある。また今回は表には含めなかったが、「天人女房」や「食わず女房」のように、女房(掣)が異類界(他界)の住人ではあっても、動物の姿をとってあらわれるようには語られない類型についても、その位置づけを考えていかねばならない。

それぞれの話型の右に示したのは、『日本昔話通観』および『韓国口碑文学大系』における類話数である。この類話数は両国におけるそれぞれの話型の伝承状況を知るための一つの目安として示したものであるが、先にも触れたように、『日本昔話通観』が約6万話、『韓国口碑文学大系』が1万5107話という両国の資料集における収録話数の規模の違い、また、『日本昔話通観』が昔話という範囲に限定して資料を集めているのに対し、『韓国口碑文学大系』は昔話と伝説、そして神話を一括して集めている点、などを考慮に入れねばならない。

これらのことを頭に入れた上で、表に示した諸類型の間の対応関係を日本と韓国の伝承の比較という観点から検討して、そこから明らかになることを簡条書きにしてみよう。

「異類掣譚」については、次のようなことが指摘できる。

- (1) 「婚姻成立型」の「変身婚姻型」(「変身婚姻・再会型」を含む)、つまり、<異類の男が人間に変身し、人間の女との結婚を成就する>という形の伝承は、両国でともに語り伝えられているが、韓国においてより顕著に幅広く伝承されている。
- (2) 「婚姻不成立型」の「計略殺害型」、<人間の女が計略を用いて異類の男を殺し、異類の男との結婚を解消する>という形の伝承は、日本においては非常に幅広く語られているが、韓国においては、この類型の伝承が見られないようである。
- (3) 「婚姻不成立型」の「子孫誕生型」は、韓国で特に幅広く語られているようである。
- (4) 「婚姻不成立型」の「墮胎型」は、日本において特に幅広く語られている伝承のようである。

また、「異類女房譚」については、次のようなことが指摘できる。

- (1) 「婚姻不成立型」の「変身婚姻型」(「変身婚姻・難題型」を含む)、<異類の女が人間に変身し、人間の男との結婚を成就する>という形の伝承は、日本においてはほとんど見られないのに対し、韓国においてはかなり幅広く伝承されている。
- (2) 「婚姻不成立型」の「禁忌離別型」、<異類の女の正体が露見したため、人間の男との結婚が解消される>という形の伝承は、韓国においてはあまり顕著には見られないが、日本においては非常に一般的な伝承である。

このように類型を整理していくと、日本と韓国の類型の間の差異点が浮かび上がってくる。従来からの日本と韓国の間説話の比較研究においては、類似する要素を抜き出して、伝播論的な議論を展開することが多いが、話の筋の展開に注目した形態論的な類型分析をおこなうと、両国

の伝承の共通点とともに、その違いが浮き彫りにされてくる。「説話から文化を読む」ことをめざす研究にとって、形態論的な視点から類型の整理をおこなっておくことは、説話の背景にある歴史や思想をより客観的に考察していくための重要な基礎作業となる。ここでは、そのような作業の一環として、日本と韓国の異類婚姻譚のさまざまな話型の相互関係を明らかにすることを試みたのである。

したがって、日本と韓国の異類婚姻譚の類型の違いが意味しているものを探っていく段階にはまだ作業が進んでいない。なぜ、日本において異類を排除する形の伝承がより好んで語られ、韓国において「異類が人間への変身を遂げて異類婚姻が成就される」形の伝承が好まれるのか、という問題について、筆者は以前の論稿で、日本の村落社会の閉鎖性と韓国の村落社会の開放性を反映したものという解釈を示したことがあるが(川森 1990:18-20)、このようなことについてより具体的、実証的に論じていくためにも、類型分析を前もってしっかりおこなっておくことが必要なのである。

本稿の議論は、個々の昔話や伝説の類型についてより詳細な考察をおこなっていくに際して、全体の見通しを得るための一つのたたき台を作ろうとするものであった。今後それぞれの話型についての丹念な分析を積み上げていくことによって、必要に応じて、本稿で設定した諸類型の表も修正していかねばならないであろう。⁽⁸⁾

一つの文化における伝承の全体の見通しをつけるための話型の相互関係のレベルの研究と、個々の話型のより詳細な研究の間の往復作業を繰り返していくことによって、説話の分析を文化の分析というマクロのレベルにつなげていくための足がかりを得ることができるものと、筆者は考える。

(付記) 本稿の内容の一部は、口承文藝學會第16回大会(1992年6月7日、於：東洋大学)で口頭発表したものにもとづいている。

註

- (1) 日本と韓国の異類婚姻譚の類型については、川森(1990)において、全体を見通すための概括的なデッサンをおこなっている。本稿は、これにさらに具体的な資料の肉付けをして、より有効な比較の土台を作ることをめざすものである。
また、より広い視野から異類婚姻譚の比較研究をおこなったものとして、小澤(1979)を参照。
- (2) 福田(1992[1990])においては、「転生婚姻型」と命名されている。
- (3) 原話は『奄美・笠利町昔話集』(立命館大学説話文学研究会, 1981年)に所収。
- (4) 第1巻(アイヌ民族篇)、第27巻(補遺)、第28巻(昔話タイプ・インデックス)、第29巻(総合索引)のそれぞれの巻をのぞいた第2巻から第26巻までに収録されている類話数である。ただし、両話型とも、結末が幸福な婚姻で終わるものについては、類話数からのぞいている。以下、『日本昔話通観』からの類話数は、同様に第2巻から第26巻までに所収の資料による。
- (5) 以下、『韓国口承文学大系』所収の類話数は、この『説話類型分類集』の項目の記載による。
- (6) 福田(1992[1990]: 489-501)は、「青大将爺」や「天稚彦草子」の類型を「転生再会型蛇罣入」と呼び、この類型の伝承を「天上界と地上の水界とを往来した竜蛇信仰に支えられたもの」と想定している。そして、日本においては、竜蛇信仰が中国大陆におけるほどの真实性をもっては迎えられな

ったので、「転生再会型」(本稿の用語でいえば「変身婚姻・再会型」)の伝承は、そのままの形では土着することができず、その受容が「みやび」の文芸の範囲にとどまったものと推定している。

(7) 形態論とは、プロップ(1983[1928])の先駆的研究やそれを発展させたダンダス(1980[1964])の研究などに示される、話の筋の展開の形に注目した分析法をさす。この方法の日本の昔話の分析への適用については、小松(1987[1984])、常光(1985)、川森(1989)などを参照。

(8) 「田螺息子」の話型については、常光(1985)が84例の類話について、形態論にもとづいた綿密な分析をおこなっている。話型レベルでこのような作業を積み上げていくことが、今後の研究の進展のためにぜひとも必要であろう。また、話型研究の最近のすぐれた成果として、昔話研究土曜会編(1991)があげられる。

*引用事例については、筆者が適宜要約や表記の統一をおこなった。

参考文献 * []内は初出年度

稲田浩二、小澤俊夫(編)

1977-90 『日本昔話通観』全29巻、同朋舎。

小澤俊夫

1979 『世界の民話一ひとと動物の婚姻譚一』、中央公論社。

韓國精神文化研究院語文研究室(編)

1980-88 『韓國口碑文學大系』全82巻、韓國精神文化研究院。

1989 『韓國口碑文學大系 別冊附録(Ⅰ)〈韓國說話類型分類集〉』、韓國精神文化研究院。

川森博司

1989 「民間說話の構造—異類婚姻譚を中心に—」『民間說話—日本の伝承世界—』福田晃編 pp.107-128, 世界思想社。

1990 「日本と韓國の異類婚姻譚—その類型比較序説—」『日本学報(大阪大学文学部日本学研究室)』9:1-22。

小松和彦

1987[1984] 「構造分析からなにが見えるか—昔話「異類聾入」の基本構造を探る—」『説話の宇宙』pp.17-40, 人文書院。

佐々木喜善

1964[1931] 『聴耳草子』、筑摩書房。

関敬吾

1978 a 『日本昔話大成』2, 角川書店。

1978 b 『日本昔話大成』3, 角川書店。

1978 c 『日本昔話大成』6, 角川書店。

1981[1959] 「民話Ⅱ」『関敬吾著作集』5:141-270, 同朋舎。

孫晋泰

1966[1930] 『朝鮮の民話』、岩崎美術社。

崔仁鶴(編著)

1974 『朝鮮昔話百選』、日本放送出版協会。

1977 『朝鮮伝説集』、日本放送出版協会。

1980 『韓國の昔話』、三弥井書店。

趙東一(編)

1980 『韓國口碑文學大系』7(1)(慶北:慶州市・月城郡篇①)、韓國精神文化研究院。

常光徹

1985 「タニシ息子の形態と諸相」『昔話伝説研究』11:22-33。

朴桂弘(編)

1981 『韓國口碑文學大系』4(2)(忠南:大徳郡編)、韓國精神文化研究院。

福田晃

1992[1990] 「水乞型蛇聾入の古層」『南島說話の研究』pp.457-506, 法政大学出版局。

松本隆信(校注)

1980 「天稚彦草子」『御伽草子集(新潮日本古典集成)』pp.77-85, 新潮社。

昔話研究土曜会（編）

1991 『昔話の成立と展開（土曜会昔話論集Ⅰ）』、昔話研究土曜会。

柳田国男

1990〔1933〕「桃太郎の誕生」『柳田国男全集（ちくま文庫）』10：7-421，筑摩書房。

アラン・ダンダス（池上嘉彦他訳）

1980〔1964〕『民話の構造＜アメリカ・インディアンの民話の形態論＞』，大修館書店。

ウラジミール・プロップ（北岡誠司，福田美智代訳）

1983〔1928〕『昔話の形態学』，白馬書房。

（国立歴史民俗博物館民俗研究部）

Pattern Analysis of *Heterogeneous-Marriage* Stories
—From a Comparison between Japan and Korea—

KAWAMORI Hiroshi

This paper aims to put in order the patterns of heterogeneous-marriage stories seen from a comparison of examples from Japan and Korea, and to provide a foothold for the examination of Japanese heterogeneous-marriage stories in the wider perspective of Eastern Asia. In the classification of the patterns, the first criterion was whether a marriage between a human being and a non-human was established or not. Then, the author classified the samples into "stories of non-human husbands" and "stories of non-human wives", and described the various patterns. In most stories in which a marriage is established, the non-human is transformed into a human being. In Japan, this pattern is not found so much, except in the story pattern of the "Pond-Snail Son". In Korea, rather many stories of this pattern are handed down, as both "stories of non-human husbands" and "stories of non-human wives". On the other hand, the majority of Japanese heterogeneous-marriage stories are of the pattern in which a marriage is not established between a human man or woman and a non-human. In Japanese stories of non-human husbands, very many tales are handed down relating to the "Monkey Husband" or the "Snake Husband, who demanded water", in which the human woman kills a non-human man by some stratagem, and thus dissolves their marriage. It seems that this type of tale is not found in Korea. In Japanese stories of non-human wives, the pattern of such stories as the "Crane Wife" and the "Snake Wife" was extensively handed down, in which the marriage is dissolved because the natural shape of the non-human wife is revealed. This pattern also exists in Korea, but is not so conspicuous as in Japan. In Korea, even in the pattern in which a marriage is not established, there are many stories in which a child of extraordinary talent is born as a result of temporary relations between a human being and a non-human. However, when making a comparison between the stories of the two countries, we should bear in mind the fact that Japanese collections of folk narratives clearly distinguish folktales from legends; as opposed to the "Collection of Orally Transmitted Korean Literature", which includes both folktales and legends together. The patterns laid out in this paper should provide a foundation for the analysis of individual story patterns, and is also a fundamental work for the "reading of culture through folk narratives".